



2012 年 11 月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 49

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 41 （聞き手 高橋素子）

高橋 > **だしぬけに咲かねばならぬ曼珠沙華 後藤夜半**

今年も俳句通りだしぬけに、畔に土手に真っ赤な曼珠沙華の花が群れ咲きました。この曼珠沙華は彼岸花、死人花など五十を超える異名を持つと言われてます。「花は葉を見ず、葉は花を見ず」と言われるように、群れ咲く真っ赤な花の姿は遠目にも、火を焚くようにも、恋の炎が燃え上がるようにも見えますね。そう言えば、会長の句に、光源氏か浄瑠璃の道行のようなご気分でお詠みになった曼珠沙華の句がありましたね。

恋に身を滅ぼす覚悟曼珠沙華 八木健

この句には、何か面白いエピソードがおりとか、お話戴けますか(笑)。

会長 > 曼珠沙華の持つイメージを詠んだもので「一物仕立て」の句なのですが、実妹に出した手紙にこの句を書き添えたところ、「取り合わせ」の句と感違いして「兄さんはどんな生活をしてるのですか？」と心配して手紙をくれたのです。「愛に溺れて破滅的な生活をしているのか」と問い質してきたのです。そこで私はふざけて**情死てふ覚悟はあらず近松忌**と書き送りました。「なんだか良くわかりませんが安心しました」と返事がきました。曼珠沙華を擬人化しただけなのですが、擬人化は恐ろしいことになりますね。

高橋 > **ふふふ！**なかなか面白いお話ですね。「一物仕立て」と「取り合わせ」では、これほど大きく意味が違ってくるのですね。擬人化も気を付けなくては(笑)。では、お

遊びはこの位にして、本日も紅緑の滑稽俳句集の句の鑑賞と解説、よろしくお願い致します。前回、「冬動物」の部、季語「海鼠」にまだ二句残っていましたので、それから始めさせて戴きたいと思います。

海鼠曰く願はくはわれ眼を得む 墨水

君知るや生海鼠は海の鼠なり 紅緑

会長 > 「海鼠曰く願はくは・・・」、海鼠には目がありませんから、海鼠の身にしてみれば「目」を欲しいということになりましょう。

「君知るや生海鼠は・・・」、海の鼠と書いて「なまこ」と読みますので、このように言ったのでしょう。海鼠の字源は、鼠のような色をしているからと、思われます。

高橋 > 成る程、海鼠に目があつて、海底を鼠のように走ったら本当に面白いでしょうね。次の季語は、「乾鮭」です。続けてご解説下さいね。

をとしの乾鮭買うてやすいもの 鬼貫

乾鮭やさすが石とも成もせず 也有

風呂敷に乾鮭と見しは卒塔婆哉 蕪村

老僧は人に非ず乾鮭は魚に非ず 子規

乾鮭は魚の枯木と申すべく 子規

乾鮭の歯をくひしばる憤り 紅緑

会長 > 「をとしの乾鮭・・・」、乾鮭は長期の保存ができますから、一昨年の売れ残りを極端に安く売っていたのでしょう。

「乾鮭やさすが石・・・」、乾鮭と言えど石ほど硬くはない。石に近い硬さでも、どこかに柔らかさが残っているということですね。

「風呂敷に乾鮭と・・・」、この句も乾鮭の硬さを言っています。風呂敷包みの上から触って見たのでしょう。意外にも卒塔婆だったという可笑しさのある句です。

「老僧は人に非ず・・・」、老僧は老獐のことですね。人生経験を積んで悪賢い老人のことですね。これは、人間じゃない。乾鮭も魚じゃないとして、人間と魚を並列にして、乾鮭に老獐が似ているというイメージをうまく表現しています。

「乾鮭は魚の枯木・・・」、これも写生句ですね。魚の枯木として、枯木のような魚と言わずに魚の枯木と断定的に表現することで、乾鮭の特徴を伝えようとしています。

「乾鮭の歯を・・・」、紅緑は歯を食いしばるとして口元に視点を置いて、魚の憤懣やる方ない意識を表現しています。勿論、魚がものを言うわけではありませんが、人間の立場で対象に入り込んでゆくかたちで擬人化しています。

高橋 > 写生句？そうですね。乾鮭は魚の枯木でもあり、ミイラ状で、言われてみれば、老獐にも似てるかも・・・。人間と乾鮭を同列に比較したり、擬人化したり、面白く乾鮭を句にしているようですね。これで「冬動物」の部は終わりです。

次は、「冬人事」の部。季語は「神の旅」と「十夜」です。「十夜」は陰暦十月六～十五日の十昼夜の間修する浄土宗の法要のことで、「おじゅうや」とも言われていますね。

鳶ひよろろひひよろ神のお立げな 一茶

夜歩門の子に門で逢ふ十夜哉 太祇

あら笑止十夜に落る庵の根太 太祇

会長 > 「鳶ひよろろ・・・」、神の旅の出立を鳶がひよろひよると鳴いて、上空を旋回しているのですね。

「夜歩門の子に門で・・・」、夜歩門といいます「散歩」でしょうか。十昼夜の法要という、いたって真面目な大人に 夜歩きの子どもを配して可笑しさを狙った句です。

「あら笑止十夜に・・・」、根太というのは 床を支える木ですね。根太が落ちる。腐ったのでしょうか。それは笑止だとしています。大きな出来事を笑い飛ばすという明るさのある句です。

高橋 > 災難を笑いとばす・・・昔の人はなかなか気持が大らかだった様ですね。次の季語は「冬籠」です。身近な事柄でもあり、面白い句が並んでいますよ。

冬籠いさりて事のすみぬべし 彫棠

晝寝して面目もなや冬籠 百明

釋迦に問ふて見たき事あり冬籠 子規

冬籠少し髯でもはやさうか 虚子

どうしても笑はぬ人と冬籠 爛腸

人間の海鼠となりて冬籠 寅日子

会長 > 「冬籠いさりて・・・」、身の回りの必要なものは手近に置き、いちいち立たなくて済むようにするのも冬籠の知恵だというのですね。

「晝寝して面目・・・」、誰かと会う約束でもしていたのでしょうか。昼寝して面会の約束を果たせない。面目ないことだとしています。

「釋迦に問ふて・・・」、冬籠は俗世間から離脱する

暮しですから、この際にお釈迦様に尋ねてみたいことをというわけですね。

「冬籠少し髯でも・・・」、髯でも生やしてみたいと、それぞれに冬籠を楽しんだようですね。

「どうしても笑はぬ・・・」、この冬籠は気が重いですね。

「人間の海鼠と・・・」、寡黙になり動きも止めて、まるで海鼠だと覚悟していますね。

高橋 > 次の季語は、「達磨忌」と「夷講」です。ひと休みしたいところですが、続けてご解

説下さいね。

達磨忌や油揚げの棒くらはせん 春來

達磨忌や達磨に似たる顔は誰 漱石

夷講酢賣に袴きせにける 芭蕉

夷講位持たる人もあり 鳴雪

夷講客に下戸ありて食ふ 骨子

会長 > 「達磨忌や油揚げ…」、油揚げに使用した棒ですから、かなり油ぎっているのでしょうね。達磨さんの

油ぎった風貌にかけたのでしょうか。

「達磨忌や達磨に…」、達磨に似た人物がいて、それが誰かということを言わないのです。言わなくても分るので、そこが可笑しいと言えば可笑しいのですね。

「夷講酢賣に…」、酢を売る商売の人が畏まって袴姿で参加したので、可笑しいと句にしたものですね。

「夷講位持たる…」、夷講は庶民の講ですが、時折、地位のある方も参加したものです。

「夷講客に下戸…」、夷講で酒を飲めない方が、ひたすら食べることに専念しているという図です。

高橋 > いろいろ昔の庶民の生活が偲ばれて、面白いですね。次の季語は「寒垢離」です。よろしくお願い致します。

寒垢離に尻を向けたり繫馬 蕪村

寒垢離の背中に龍の披露かな 一茶

会長 > 「寒垢離に尻を…」、寒垢離は 寒の三十日間、心身を清めて神仏に仕えるこ

と。冷水を浴びたり、滝に打たれたりして経を唱える寒行とも言います。行の厳しさに無頓着な馬が尻を向けた。そこが可笑しいのですね。

「寒垢離の背中に・・・」、寒行をする男の背中に、「龍」の彫り物がしてあるのですね。見せびらかしているのでしょうか。神聖と俗の対比の可笑しさでしょうか。

高橋 > 今日も楽しくて為になるご解説、本当に有難うございました。残念ながら、お時間になってしまいました。次回がまたまた楽しみです。では、本日もご好評の虎造節でインタビューして下さいね。

会長 > はいはい！それでは、今日の季語を使って、虎造節のひと節を。

♪ 七転び八起をみせるううう達磨さん

転んで只では起きぬ性分でええええ

ちゃっかり薬喰いして戻るううう♪

♪ ちょうど時間となりましたああ

またの口演つかまつるううう♪